昭和58年度研究報告書

未熟児新生児の内分泌機能とくに甲状腺機能と乳児突然死症候群との関連について

東京都立築地産院小児科

多田　裕

1．当院出生児中のSIDS発症例の検討

東京都立築地産院出生児の中でSIDSがどの程度発生するか検討し、出生前後の経過との関連を知るために、昭和50年1月から昭和51年12月迄に出生した3316例につき検討した。このうち19例（0.57%）の死亡が確認されたが、死因は先天性心疾患7例、奇形5例、感染症3例、新生児仮死、頭蓋内出血、肺出血、副腎出血各1例で突然死と思はれる症例は認められなかった。追跡率は生後6ケ月で70.5%、生後1年時点で64.5%であった。

2．当院出産経産妊婦中の児死亡既往歴の検討

東京都立築地産院で出産した妊婦の既往歴をしらべ、SIDSに相当する死亡を経験しているかどうかを検討した。

昭和57年1月から昭和58年12月迄に出産した妊婦3967例の中の経産婦は2267例(57.2%)であったが、このうち28例(1.2%)が既往に児死亡を経験していた。

その死因は、未熟による死亡14例、仮死等による出生後間もない時期の死亡7例、先天性心疾患、奇形による死亡4例で、このほかにダウン症候群(6才)、脳腫瘍(13才)、神経茅細胞腫（5ケ月）各1例であり、突然死と思はれる原因により既往に児を死亡させている妊婦は発見出来なかった。

3．新生児死亡例中の内分泌疾患

当院の新生児死亡率の変遷を5年毎に分けて見ると、昭和39～43年10.5‰、昭和44年～48年、7.3‰、昭和49～53年5.6‰、昭和54年～58年4.9‰と次第に低下してきているがこの中で、内分泌系の異常を伴っていた症例は4例にすぎず、3例に副腎出血、1例に副腎低形成が認められたが、それぞれ、全身性出血、くも膜下出血、低酸素性脳障害、無気肺などを伴っており、内分泌疾患のために突然死となった症例は認められなかった。

4．低出生体重児の甲状腺機能

SIDSは、未熟児として出生した例や無呼吸や低酸素状態が続いている児に多いことが

報告されている。

そこで昭和57年1月から12月迄に出生した児の中の無呼吸発作の頻度を見たところ、出生体重1.0kg未満では75%(6/8)、1.0～1.5kgでは57.1%(4/7)で無呼吸が頻発したが、1.5～2.0kgでは6.7%(1/15)、2.0～2.5kgでは1.1%(1/89)、2.5kg以上0.3%(5/1764)と1.5kg以上の児では無呼吸発作の頻度はいちじるしく低下した。

しかし無呼吸発作を頻発した児でも後にSIDSとなった例はなかった。

5．極小未熟児の甲状腺機能

前項のように極小未熟児では無呼吸発作が多いので、このような異常が内分泌機能とくにSIDSではTriiodothyronine(T_3)が高値であるとの報告もあるので甲状腺機能と関係があるか否かを検討した。

出生体重1500g未満のAFD児51例SFD児11例につき濾紙血によりT_4、TSHを測定したが、Thyroxine(T_4)は極小未熟児では著しい低値を示したが、生後経過とともに上昇し、甲状腺機能が次第に成熟することが明らかになった。呼吸障害のある例ではT_4が低値であるとの報告もあるが、在胎週数＋生後週数を等しくして比較すると呼吸障害や無呼吸発作の有無とT_4値の間には差は認められなかった。

未熟な児ではT_4が低値であったが、TSHの上昇は認められなかった。

SIDSではT_4に比しT_3が著しい高値であるとの報告もあるが、生後2ケ月以内にT_3とT_4との関係を見た結果では、T_4低値の極小未熟児を含めT_4が高くなるに従いT_3も高値となり無呼吸発作をおこしやすい未熟児ではT_4に比しT_3が高値との傾向は認められなかった。

また成熟児での無呼吸頻発例でも甲状腺機能に異常はなく、逆に甲状腺ホルモンが異常値を示す例に呼吸障害は認められず、甲状腺機能特にT_3と無呼吸の間の関連は認められなかった。

6．まとめ

東京都立築地産院にて出産した妊婦の既往中や出生した児の中にSIDSは認められなかったが、未熟児の中には無呼吸発作を頻発する例が多く、また未熟児では成熟児や年長児に比し異なった内分泌機能を有していることが明らかになった。未熟児として出生した児にSIDSが多いとされるが、内分泌機能の未熟性とSIDSとの関連については今回の研究では明らかでなく、今後の検討が必要であると考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

6.まとめ

東京都立築地産院にて出産した妊婦の既往中や出生した児の中に SIDS は認められなかったが・未熟児の中には無呼吸発作を頻発する例が多く、また未熟児では成熟児や年長児に比し異なった内分泌機能を有していることが明らかになった。未熟児として出生した児に SIDS が多いとされるが、内分泌機能の未熟性と SIDS との関連については今回の研究では明らかでなく、今後の検討が必要であると考えられる。